

日本語の品詞区分の再検討のために*

戸田 聡

0. はじめに

学問の専門分化が極度に進展した今日、自分の専門以外の分野への貢献が可能だなど考えることは、もとより狂気の沙汰だろうが、筆者がそのような暴挙を敢行するのは、筆者自身の性格もさることながら、これまで自らの専門領域での勉強の中で、英独仏だけでなく、ギリシア語・ラテン語、さらに複数のセム語（古典シリア語・ヘブル語・アラビア語・古典エチオピア語）やその他の言語（アルメニア語・グルジア語）、そして特にコプト語（古代エジプト語の後期段階を成す言語）など、十指に余る言語を学ぶ中で、従来の日本語文法の日本語把握の仕方には問題があると確信するに至ったからである。専門家からは論文扱いされないであろう、門外漢による文字どおりの拙論を、あえて公けにしようと思った所以である。

* 本稿で使う略号は以下のとおり。

庵『入門』=庵功雄『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』、第2版、スリーエーネットワーク、2012年（初版は2001年）

『新明解』=山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編『新明解国語辞典』、第7版、三省堂、2012年
寺村『シンタクス』=寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味』（全3巻、くろしお出版、1982-1991年）

寺村（1982）=同上第1巻、寺村（1984）=同第2巻

時枝『文語』=時枝誠記『日本文法 文語篇』（岩波全書）、岩波書店、1954年

ところで、日本語を研究する学問としては、国語学の他に「日本語学」と称される分野があるようであり、特に後者では、筆者が中等教育段階などで学んだいわゆる学校文法と相当異なるものが、日本語文法（外国人への日本語教育を意識した学習用文法と言えようか）として教えられ、かつ構想されている⁽¹⁾。そのような学問分野への目配りも、もとより門外漢ゆえの限界は否めないが、行論上必要な最小限度で行なうよう努めたい。

1. 日本語の品詞区分をめぐる問題

日本語の品詞区分に関する従来の理解の妥当性を再検討するという本稿の問題が、奈辺に存するかは、国語辞典における単語の提示の仕方を見ることによって明確化できる。筆者は普段『広辞苑』や『新明解国語辞典』を使っているが、まず『広辞苑』では「見出し語の排列」の項の中で同音の語の排列方法について、次のようにある⁽²⁾。

- 1 品詞の順——名詞、代名詞、動詞、形容詞、連体詞、枕詞、副詞、助動詞、助詞、接続詞、接頭語、接尾語、感動詞の順に配列した。

この品詞列挙の中にはいわゆる形容動詞は見られない。『広辞苑』の場合、いわゆる形容動詞に関する説明は付録の「日本文法概説」の中に若干見られ、そこでは、いわゆる形容動詞を独立した品詞として認める説と認めない説の両論が併記され、そして同辞典でのいわゆる形容動詞の扱い方については「本書における見出しは語幹だけを示し、品詞表示も見出しの形式に合わせて名詞と同等に扱う」⁽³⁾とのみある。

『新明解』では、巻頭「編集方針」の「品詞などの指示」に次のような説明がある⁽⁴⁾。

- 23 【 】の直下に（かな表記のものは見出し、またはアクセントの

直下に)、名詞以外の品詞名を()に包んで示した。

(中略)

25 名詞・副詞のうち、サ変動詞またはいわゆる形容動詞としての用法を併せ有するものは次のごとく扱った。(後略)

つまり同辞典の場合、いわゆる形容動詞ははっきり名詞の一部とされており、よって、名詞以外の品詞名が表示される場合に「(形容動詞)」という表示はないようである。

だが、少なくとも『新明解』のこの方針は全く誤っている(また、いわゆる形容動詞を名詞と同等に扱う『広辞苑』の方針も極めて問題적이다)。なぜなら、少なくとも、和語から成るいわゆる形容動詞(の語幹)、具体的には「静か」「穏やか」「朗らか」「悲しげ」は、名詞のように主語にはなりえないからである⁽⁵⁾。

かくて、まずいわゆる形容動詞をどう扱うかについて、少なくとも最近の国語辞典で見限る限りでは、定説がないと見てよいようである⁽⁶⁾。そこでまず、このいわゆる形容動詞をどう扱うかということを考える必要がある。

検討を始める前に、ここで筆者の基本的な立場を明確にしておきたい。上述のように印欧語族の諸言語などを学んだ筆者としては、一つの言語の文法的記述は、なるべく他の諸言語との比較に対して開かれた形で、すなわち極力、他の諸言語で使われているのと同じ文法範疇(品詞を始めとする)を同じ仕方で使うことによって、行なわれるべきだと考える。

このような考え方に対しては、例えば時枝誠記の次の言葉が想起されるかもしれない⁽⁷⁾。

今日、文法学の基礎知識は、日本語についてよりも、むしろ英、仏、独等のヨーロッパの諸国語について与えられる方が多い。そこで、日本語の文法についても、ヨーロッパの諸言語の文法を基準にして考えたがる。その結果、割切れない多くの現象に行き当るのであるが、言

語は伝統的なものであり、歴史的なものであって、思考の法則が普遍的であるようには、言語の法則は一般的な原理で律することが出来ないものを持っている。日本語の文法は、日本語そのものに即して観察されないかぎり、正しい結論を得ることは困難なのである。ヨーロッパの言語の法則が、一般文法の原理であるかのような錯覚を打破することが何よりも大切である。

日本語文法を日本語の言語事実に即して提示するべきなのは当然であり、筆者とて、ヨーロッパの言語の法則を金科玉条にしているわけでは全くない（日本語との対照的比較という点で特に有意義だと筆者に思えた言語は、コプト語である）。但し、ヨーロッパ諸語を基に成立した文法範疇にはそれなりの含意があるのであり、その含意を無視してそれら文法範疇を使うことは単なる自己満足でしかなく、自己満足の文法は、他の諸言語との比較に対して開かれたものとは到底言えない。日本語の正確な観察と、文法範疇の正確な理解が相俟って初めて、日本語をその文法的独自性において、しかも他の諸言語との比較に対して開かれた形で、把握できるのではないか。この点をまず強調しておきたい。

次に、基本的に本稿は日本語文法の共時的分析を指向するが、言語は無論その時々において過去からの歴史を引きずるものであり、仮に共時的な分析が指向されても、通時的な問題或いは理解への顧慮を全く欠いた共時的な分析はありえない。それゆえ本稿では、日本語文法の通時的理解に対しても開かれた共時的分析を提示することを目指したい。この点もまた、ここで強調しておきたい。

2. いわゆる形容動詞をどう考えるべきか

さて、いわゆる形容動詞をどう理解するべきかについて日本語学者の説を見ると、「形容動詞」という用語は使われず、いわゆる形容詞が「イ形

容詞」, これに対していわゆる形容動詞が「ナ形容詞」と、それぞれ呼ばれている⁽⁸⁾。

本稿はこのような「形容詞」・「形容動詞」理解をまず批判しなければならない。

印欧語族の諸言語でもセム語族の諸言語でも、形態論 (morphology) 的に見て、ふつう形容詞は名詞と同様に扱われ、動詞とは区別される⁽⁹⁾。考えてみればこれは当たり前であって、というのも、形容詞の基本的な機能は名詞の修飾にあり、それゆえ基本的に形容詞は言わば「名詞と行動を共にする」からである。そこで、格変化が発達した言語 (例えばギリシア語、ラテン語、ドイツ語、スラヴ語) では、名詞の変化と形容詞の変化はほぼ同様となる⁽¹⁰⁾。また、形容詞の名詞化という現象も様々な言語でよく見られるが、これもまた、名詞を修飾するという形容詞の基本的機能に由来する現象だと言える。

つまり、印欧語やセム語で言われる形容詞は、形態論上、名詞と同じ (或いはほぼ同じ) 地位に立つと考えてよい。「同じ地位に立つ」という言い方は曖昧かもしれないが、要するに、名詞が格語尾に当たるものをとるのであれば、形容詞もまた格語尾に当たるようなものをとると理解するべきであり、他方、格語尾から切り離されたものを名詞と理解するのなら (この場合、当の名詞はそれだけでは文の構成要素たりえず、それが文の構成要素となるためには格語尾を従えることが必要となる)、形容詞についても、格語尾に当たるようなものから切り離されたものを形容詞だと理解するべきである。

☆議論を進める前に、ここで次の問いを考えておきたい。すなわち、日本語の名詞は、格語尾 (より正確には格助詞) をつけたものとして理解されるべきか、それとも格語尾から切り離されたものとして理解されるべきか。これについては、一般に国語辞典がそうしているように、格語尾から切り離されたものを名詞と認識するのが妥当である。

例えば「に」という形態素を考えると、私見によれば、日本語の「に」には

①与格 (dative, すなわち間接目的語の格) の助詞として使われる「に」

②所格 (locative, すなわち場所を表す格) の助詞として使われる「に」

③「確かに」「やわらかに」などと、いわゆる形容動詞の語幹の後に
ついて副詞を作る「に」

がある(接続助詞、終助詞としての「に」はここではとりあえず度外視する)。このうち③の「に」は、それだけでは独立の品詞にはならず、英語で形容詞から副詞を作る形態素 *-ly* に比定されうる⁽¹¹⁾。これに対して①と②は、独立の品詞と理解することができ、英語など印欧語の前置詞に当たると考えられる(なお無論、日本語の①と②は、名詞の後ろに置かれるものであり、正確には前置詞でなく後置詞である)。しかも①と②は区別が可能である。例えば

「人々はグラウンドに集まった」

という文では、動詞「集まった」が目的語をとらない自動詞なので、「に」は所格の助詞だと考えられる。これに対して

「人々はそのグラウンドに名前をつけた」

という文の「に」は、与格の助詞だと考えられる。かくて、膠着語である日本語の場合、名詞と格語尾(格助詞)を明確に分離でき、しかもその格助詞が同じ音であっても複数のものに区分できるのでから⁽¹²⁾、名詞と格語尾は切り離して認識するのが妥当である⁽¹³⁾。☆

以上から明らかなように、日本語の名詞は、格助詞と切り離された形を以て名詞とせねばならない。であれば、日本語の中で、印欧語等と言う意味での形容詞に値するものは、それが形態論上、名詞と同じ(或いはほぼ同じ)地位に立つ以上、それ自体、格助詞(のようなもの)と切り離され

た形で存在せねばならない。つまり日本語において、印欧語等で言う意味での形容詞に値するものは、名詞と同様、それだけでは文の構成要素たりえないものでなければならないことになる。

そうだとすると、日本語文法のいわゆる形容詞（高い、優しいなど、上述の「イ形容詞」）が、印欧語等で言う意味での形容詞に当たらないことは明白である。なぜならそれらいわゆる形容詞は、それだけで文の構成要素たりうるからである。言い換えれば、いわゆる形容詞は形態論上の地位が名詞と同じでないと言わざるをえない。

ならば、形態論上の地位が名詞と同じであり、かつ「形容詞」という呼び名にふさわしいものは何か。いわゆる形容動詞の語幹がそれだと言える（静か、穏やか、朗らか、悲しげ；親切、丁寧、立派；楽天的、好意的；モダン、ノーマル、ファナティック）。形容動詞の語幹は、名詞と同様それだけでは文の構成要素たりえず、「な」を従えて初めて文の構成要素たりうるからである⁽¹⁴⁾。

したがって日本語では、いわゆる形容動詞の語幹こそが、印欧語等におけるように形態論的含意を踏まえた意味での（つまり、本来の意味での）形容詞と呼ばれるにふさわしく、これに対していわゆる形容詞は、印欧語等におけるように形態論的含意を踏まえた意味での（つまり、本来の意味での）形容詞には当たらないことになる。そこで、言わば玉突き的に、いわゆる形容詞をどのように考えるべきかが次に問題となる。

ただ、この点を論じるには、日本語の動詞における活用をどう捉えるかという点を予め見ておく必要がある。

3. 日本語の動詞における活用をどう捉えるべきか

3.1. 動詞の活用一般をめぐって

まず、一般に動詞の活用とは何かを確認しておかねばならない。ヨーロッパの言語の場合、動詞はふつう主語の人称・数（或いは、場合によって

はさらに^{ジェンダー}性)を基準にして活用し、その活用した形のことを定形または定動詞 (finite verb) と言う。

ここで、一見全く別の議論に見えるが、実際には大いに関係のある議論をとりあげておきたい。それは、長らく在野で日本語研究を営んだ、その意味で異端の日本語学者と言ってよい三上章の主語廃止論である。庵功雄による整理に拠って同論を紹介すると⁽¹⁵⁾、

三上の主語に関する立場は主格＝主語説であり、その立場から日本語には主語がないと主張する。その議論は単純明快である。その主張を最も明確に表している(中略)次の部分を再掲する。

(9) 西洋文法の主語とは、動詞を支配するものにほかならない。

それは次のような条件を満たすものである。

□は述語 (finite verb)⁽¹⁶⁾と呼応し、□以外の成分(たとえば目的語など)は述語と呼応しない。つまり□だけが述語と呼応する。

この空箱に入れられる文法的成分がもしあれば、それと述語との呼応関係が主述関係であり、したがってそれが主語ということになる。

この空箱に入れられる成分があるかないかは、国々の言語習慣次第であって、アプリアリの問題ではない。日本語は、空箱に入れられるような成分がない。

(『[日本語の] 論理』 pp. 67-68)

この三上の主張を例を用いて考えてみよう。

(10) John loves Mary.

(10)で述語の形を決めるのは“John”であり“Mary”ではない。(中略)英語(や大部分のヨーロッパ言語)では主格のみが述語の形を規定する。こうした現象を主格名詞句が述語と一致すると言うが、こうした一致 (agreement) がある場合、その一致を引き起こす名詞句を

「主語」と呼ぶというのが三上の考え方である。そして、そうした観点から日本語を見ると、そうした条件を満たす名詞句は日本語には存在しない。従って、日本語には主語はない。これが三上の主語廃止論である。

以上、庵の整理による三上章の主語廃止論を見てきたが、三上のこの議論は全く誤っている。なぜなら、この伝で行けば、主語の人称・数などに基づいて動詞が活用する言語以外の言語には、押しなべて主語が存在しないことになるが、それが妥当でないことは、例えば、孤立語である中国語の次の文を考えれば明らかだからである。

我唱歌（私は歌をうたう）

この文の場合、動詞は「唱」、目的語は「歌」、そして主語は「我」であり、この文をこれ以外の仕方で文法的に分析することは事実上不可能である⁽¹⁷⁾。

そもそも、主語は典型的には、動作を表す動詞が文中にある場合にその動作の主体を表す語であって、そのような語を表す格が主格であると言えるが、この規定自体は、当の動詞が主語の人称・数などに基づいて活用するかどうかということとは無関係である。当然ながら、孤立語にも主語はあるのである。であれば、一応曲がりなりにも動詞が活用する日本語にも主語の存在を認めることは少しも奇異でなく、むしろ、論理を語るものとしての言語という、言語の本質に照らすなら、主語を認めないほうが遙かにおかしい。

但し、主語の人称・数などに基づく活用のみを動詞の活用と認めるべきかどうかは別問題である。例えば、上の引用で例に挙げられている現代英語の場合、動詞の活用はいわゆる「3 単現 s」の異形を残すのみで、主語が 3 人称単数以外の形をとる場合には、動詞はもはや別々の活用形をとら

ない。しかも口語英語では、主語が3人称単数の場合でも3単現sがつかない形が使われることも稀でない。少なくとも現代英語の場合、動詞が主語の人称・数などに基づいて活用しているかどうかは甚だ疑わしいのである。

ならば、動詞の活用の基準（それを基にして動詞の形が変わる、当の基準）として、主語の人称・数など以外の基準はあるのか。この問いへの答えは、文中で動詞がどう位置づけられているかを見ることによって得られる。すなわち、上の例で見たように、

John loves Mary.

我唱歌

のいずれの場合でも、動詞は文中で文頭から数えて2番目の要素を成している（ドイツ語文法を勉強した者は、ドイツ語教師が「定形第2位」という表現を連呼して、学習者を悩ませたことを容易に想起するだろう）。この点は、世界の言語を分類するための一つの型として広く認められているSVO言語の特徴を成している。つまりSVO言語では、文中で動詞は、文頭から数えて2番目の要素を成す⁽¹⁸⁾。換言すれば、SVO言語の場合、動詞は、文頭から数えて2番目の要素を成すという規定性のもとにあると言ってよい。

文頭から数えて2番目の要素を成すという、動詞の規定性が、日本語に妥当しないことは自明である。日本語は、SVO言語でなくSOV言語に属するからである。だが、ならばSOV言語については動詞の規定性なるものは考慮する必要がないのか。そうでないことは、SOV言語という言い方それ自体が示している。つまりSOV言語の場合、動詞は、文の主語と目的語よりもさらに後ろに来る（概して文末或いは節の末尾に来る⁽¹⁹⁾）要素を成すという規定性のもとにあると言ってよい。SVO言語について動詞の規定性ということが言える以上、当然SOV言語についても言える

はずである。

そして、日本語の動詞の活用形について、学校文法のいわゆる活用表に見える多くの形は実際、節を終止させる機能を有すると理解できる。具体的に言えば、

いわゆる終止形：主節の末尾に来て、主節を終止させる

(例：先生は論文を書く。／彼はその写真を見る。)

いわゆる連体形：名詞修飾節（つまり、節全体で名詞を修飾している節）⁽²⁰⁾の末尾に来て、名詞修飾節を終止させる

(例：先生が書く論文は、……／彼が見る写真は、……)

いわゆる仮定形：接続助詞「ば」などを伴って条件節などの末尾に来て、条件節などを終止させる⁽²¹⁾

(例：その論文を書けば、先生は……／その写真を見れば、彼は……)

いわゆる命令形：命令節の末尾に来て、命令節を終止させる

(例：論文を書け。／その写真を見ろ。)

従来の学校文法に従ってこれらの形を動詞の活用形とみなすことについて、筆者はいかなる問題も感じないし、上述のように、このような活用理解は、日本語がSOV言語であるという周知の理解にも即している。よって、日本語における動詞の活用では、動詞は、異なる様々な節を終止させるために異なる形（活用形）をとる、と理解することができる。本稿ではこれを、日本語の動詞の活用の定義として提案したい。

3.2. いわゆる連用形をめぐって

但し、こう述べた場合、学校文法の活用表に見られる形であって今述べた活用理解に抵触する形があることに我々は直ちに気づく。それはいわゆる連用形である⁽²²⁾。つまり、いわゆる連用形には「中止法」という用法

があるが、これは、節を終止させずに次の動詞につなげ、そして節の終止を後に出てくる動詞に委ねる用法だと言える。具体的に、

「私はその本を読み、感動した。」

という文に出てくる、動詞「読む」のいわゆる連用形「読み」に対応するのは、

「読んだ、そして」

だと言することができる⁽²³⁾。確かにいわゆる連用形は節を中止させない。よって、いわゆる連用形（ここでの議論からすれば、これを未終止形と呼ぶことができよう）は、上で述べた、本稿が提案する活用の定義からすれば、活用形の一つではないことになる。

ならば、いわゆる連用形はどう位置づけるべきか。本稿は上で学校文法に従い、いわゆる終止形・いわゆる連体形・いわゆる仮定形・いわゆる命令形を動詞の活用形とみなすことを是としたが、実は正確に言えば、本稿の活用理解には、従来の活用理解にない新たな要素が既に加わっている。それは、本稿で言う活用形は、（印欧語やその他の言語における動詞の活用形について言えるのと同様）これを定形・定動詞（finite verb）と呼べる、と本稿が理解しているということである。いやしくも動詞に活用を認めるなら、定形・定動詞という言い方は、必ず認めなければならないはずであり（なぜなら動詞の活用した形は、それ自体定義上、定形・定動詞からである）、本稿は、印欧語などの文法範疇にもともと含まれている形態論的含意を単に明確化しているにすぎない。

かくて、本稿のような活用理解に立てば、いわゆる連用形は定形・定動詞とは言えないことになる。ならば、それはどういう形なのか。それは、定形・定動詞（finite verb）でない形、つまり不定形（infinitive）だと言

うことができる。

では、いわゆる連用形の用法としてこれまで言われてきたことは、この形を不定形と理解することによってどう見えてくるか。次にこの点を見ておきたい。

いわゆる連用形の定義ないし意味について解説しているものは、文法書でも辞典でも多くなく、筆者が見つけた限りで最も詳しいのは、『新明解』の「口語動詞活用表」の表の中に出てくる次の説明である⁽²⁴⁾。

「(連用形) 中止法。複合動詞の前項。助詞「て・ながら」、助動詞「ます・た・たい・そうだ・(様態)」などに続く」

また、同辞典の「連用形」の語義説明には次のようにある⁽²⁵⁾。

「〔日本語文法で〕活用語の語形の一つ。用言を就職したり、文を一時中止したりするほか、助詞「て」、助動詞「た」などが接続するときの形。動詞では、そのまま名詞形として用いられるものもある⁽²⁶⁾。」

さらに、時枝『文語』は次の用法を列挙している（下線は、それぞれの例文におけるいわゆる連用形を示す）⁽²⁷⁾。

「一 述語格の中止法を表はす。

もの心細げに、里がちなるを

花咲き、鳥歌ふ。

水清く、風涼し。

二 連用修飾格を表はす。

風、静かに吹く。

花、美しく咲く。

花、咲き乱る。

三 条件格を表はす.

庭の面はまだかはかぬに, ……

「悩ましきに, ……」

右の「に」は、ともに指定助動詞の連用形で、「庭の面がまだぬれてゐること」「悩ましいこと」が、下の文の条件になってゐることを表はす。」

さらに、いわゆる連用形は「駅まで迎えに出る」「本を買いに行く」といった表現でも使われている。

以上で、いわゆる連用形の用法はほぼ尽きていると見てよいだろう。そこで以下、逐条的に見ていくと、まず①いわゆる中止法は、いわゆる連用形が日本語の動詞の活用形でないこと（すなわち不定形であること）それ自体の現れだと理解することができる⁽²⁸⁾。

次に、②「複合動詞の前項」とは、次のような例を念頭に置いた言い方だろう。

「書き始める」「着終える」「溶け切る」「読み下す」

これらの形については、いわゆる連用形を不定形と理解しても、言語理解の上で何ら支障は生じない。否むしろ、不定形と理解するほうが、当の複合動詞全体（「書き始める」等々）を一語と理解するのにより一層適格的だと言える。

この関連で、③丁寧を表す助動詞「～ます」については、『広辞苑』によればこの「助動詞」は「まゐらす」という動詞に由来するとのことであり、「ます」が不定形に連なることについては、今述べた複合動詞の場合と同様の説明が可能である。

次に、④助詞「て」及び助動詞「た」を従える用法については、私見によれば別の説明を必要とする。後述 3.3. を参照。

次に、⑤助詞「ながら」を従える用法については、これは日本語の不定形がイコール未終止形であるとする本稿の理解に良く合致する用法だと言える。

次に、⑥「～したい」という言い回しは、印欧語の〈「欲する」という意味の動詞〉+〈不定詞〉（例えば仏 *désirer* + *inf.*）に良く合致した表現だと言える。

次に、⑦「～しそうだ」という言い回しは、印欧語の〈「～しようとする」という意味の動詞〉+〈不定詞〉（例えば英 *threaten* + *to do*）に良く合致した表現だと言える⁽²⁹⁾。

次に、⑧動詞（より正確には、-u で終わる動詞）のいわゆる連用形がそのまま名詞形として用いられる用法については、そもそも不定詞は動詞と名詞の側面を合わせ持つのであり、当の用法は不定形概念の中にもともと含まれていると言うことができる。

次に、時枝『文語』に示されている用法である⑨「連用修飾格を表す」については、まず「静かに」は、形容詞「静か」に、形容詞から副詞を作る形態素「に」（英語の *-ly* を想起）がついてできた副詞だと理解するべきである。次に「美しく」は、いわゆる形容詞のいわゆる連用形だが、ここでは明らかに動詞「咲く」を修飾する副詞として機能していると理解するのが妥当である。次に「咲き乱る」（口語では「咲き乱れる」）は、既に見た複合動詞の一例として理解できる。

次に、時枝『文語』に示されている用法である⑩「条件格を表す」については、そもそも条件格という言い方自体は時枝独特の文法用語であり、筆者は支持できない。そして、いずれにせよ上記例文で挙げられている「に」は、連用形と解するよりむしろ、さしあたり接続助詞と解するほうが妥当だと筆者には思われる。

最後に、⑪「駅まで迎えに出る」「本を買いに行く」という表現については、ここに出てくる不定形「迎え」「買い」は、例えば英語の不定詞の「目的を表す用法」に良く合致していると言える。

以上、いわゆる連用形の用法を不定形（或いは未終止形）の用法として読み替えた場合に事態がどう見えてくるかを概観してきたが、公平に見て、不定形（或いは未終止形）と理解したほうが、当の用法をより良く理解できる場合が多いと言えよう。

いわゆる連用形という概念は、これを不定形（或いは未終止形）と捉え直すことによってより良く理解できる。これを本稿の主張として提示しておきたい。

3.3. 活用表とアスペクト

ところで、本稿でこれまでペンディングにしてきた問題は、いわゆる形容詞をどう考えるべきか、という問題である。もちろん本稿は、この問題にも解答を提示したいと考えるが、その前にここで、活用表のあり方について考えておきたい。日本語における動詞の活用表をどう理解して提示するべきかという問題が、日本語のいわゆる形容詞をどう考えるべきかという問題にも、照明を与えてくれると思われるからである。

活用表を構想する際の行き方には種々ありえようが、印欧語やセム語の文法の学習からわかるのは、アスペクトの違いということの重要性である。つまり、これは世界の多くの言語についても妥当すると思われるが、完了と継続（言い換えれば未完了）という ^{アスペクト}相 の対立が、印欧語やセム語における動詞の活用を根本的に規定していると言うことができる。この点はセム語の場合には一見して明らかで、すなわちセム語の完了形（或いは完了 ^{アスペクト}相）では、人称を表す部分は動詞語幹の後につき、これに対して未完了形（或いは継続 ^{アスペクト}相）では、人称を表す部分は動詞語幹の前につくのである。これに対して印欧語では、完了相と継続相の対立が動詞の活用を根本的に規定している、ということは直には理解しがたい。印欧語では、アスペクトの対立に加えて、現在―過去―未来という時制区分が動詞の活用の根本を成しているからである（印欧語の中でも、例えばラテン語など、言語によっては、むしろ時制区分こそが活用の根本を成すと理解できる言

語もある)。しかし例えば、20世紀前半の印欧語比較文法研究の大家 A. Meillet は、「印欧語 [「印欧語族の共通祖語」の意……戸田] の「時間的」語幹の価値は、スラヴ語のアスペクトの価値に似ているのであって、ゲルマン語或いはラテン語の「時制」の価値に似ているのではない」と言い、印欧語においても、もともと動詞の活用 of the 根本を成していたのはアスペクトの対立である、ということを示唆している⁽³⁰⁾。日本語文法の場合でも、活用表は、アスペクトの対立を考慮に入れて構想されるのが望ましい。

この観点からアスペクトに関する日本語学の議論を見ると、その奇妙さに気づく。例えば、アスペクトに関して日本語学で見られる議論は次のようなものらしい⁽³¹⁾。

1. アスペクトとは

まず、次の2文を比べてみましょう。

(1)a. 太郎はさっきごはんを食べた。

b. 太郎はさっきごはんを食べていた。(以下略)

確かに、「食べた」と「食べていた」ではアスペクトが異なるが、「食べていた」は複合動詞（食べる＋いる）、他方「食べた」は複合動詞でない動詞、つまり基本動詞である。両者の比較は、上述した諸言語に見られるようなアスペクトの根本的重要性にかかわる議論ではなく、つまりこの議論は、活用表に反映されるべき意味でのアスペクトを扱ってはいない。アスペクトについても、日本語学はこの文法範疇の形態論的含意を把握しそこなっているのではあるまいか⁽³²⁾。アスペクトを論じる場合には、何よりもまず、アスペクトの違いが活用形（つまり形態論上の差異）に現れているという側面に注目すべきであり、つまり、形態論にかかわってくるアスペクトこそが、当該言語の持つ様々なアスペクトの中で最も重要だと言うべきである。

では、そのようなアスペクトに注目して活用表を構想することは、日本

語の場合可能なのか。もちろん可能であり，次のような活用表が構想できる。

① 基本形

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	書く／見る	書いた／見た
	kak-u mi-ru	ka(k)i-ta ⁽³³⁾ mi-ta
名詞 修飾形 ⁽³⁴⁾	書く／見る	書いた／見た
	kak-u mi-ru	ka(k)i-ta mi-ta
假定形	書け(ば)／見れ(ば)	書いたら／見たら
	kak-e(ba) mi-re(ba)	ka(k)i-tara mi-tara
命令形	書け／見ろ	—／—
	kak-e mi-ro	
未終止形 (不定形)	書き／見	書いて／見て
	kak-i mi	ka(k)i-te mi-te

このような活用表は，以上の形（動詞の基本形と呼ぶことができよう）から派生した形についても同様に作ることができる。具体的に言えば

② 使役形

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	書かせる／見せる	書かせた／見せた
	kakase-ru mise-ru	kakase-ta mise-ta
名詞 修飾形	書かせる／見せる	書かせた／見せた
	kakase-ru mise-ru	kakase-ta mise-ta
假定形	書かせれ(ば)／見せれ(ば)	(書かせたなら)／(見せたなら)
	kakase-re(ba) mise-re(ba)	(kakaseta-nara) (miseta-nara)
命令形	書かせろ／見せろ	—／—
	kakase-ro mise-ro	
未終止形 (不定形)	書かせ／見せ	書かせて／見せて
	kak-ase mi-se	kakase-te mise-te

③ 受身形⁽³⁵⁾

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	書かれる／見られる	書かれた／見られた
	kakare-ru mirare-ru	kakare-ta mirare-ta
名詞 修飾形	書かれる／見られる	書かれた／見られた
	kakare-ru mirare-ru	kakare-ta mirare-ta
仮定形	書かれれ(ば)／見られれ(ば)	(書かれたなら)／(見られたなら)
	kakare-re(ba) mirare-re(ba)	(kakareta-nara) (mirareta-nara)
命令形	書かれよ／見られよ	—／—
	kakare-yo mirare-yo	
未終止形 (不定形)	書かれ／見られ	書かれて／見られて
	kak-are mi-rare	kakare-te mirare-te

④ 使役受身形

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	書かせられる／見せられる	書かせられた／見せられた
	kakaserare-ru miserare-ru	kakaserare-ta miserare-ta
名詞 修飾形	書かせられる／見せられる	書かせられた／見せられた
	kakaserare-ru miserare-ru	kakaserare-ta miserare-ta
仮定形	書かせられれ(ば)／見せられれ(ば)	(書かせられたなら)／(見せられたなら)
	kakaserare-re(ba) miserare-re(ba)	(kakaserareta-nara) (miserareta-nara)
命令形	書かせられよ／見せられよ	—／—
	kakaserare-yo miserare-yo	
未終止形 (不定形)	書かせられ／見せられ	書かせられて／見せられて
	kak-aserare mi-serare	kakaserare-te miserare-te

ここで、これら派生形（使役形、受身形、使役受身形）についても活用表を作る理由を述べると、まず受身形は、他の諸言語でも活用表において取り扱われるのがふつうである（し、またそうされるべき）形だからである。そして日本語の場合、受身表現と使役表現が重なる場合には、上表に

見られるようにいわゆる使役の助動詞のほうが語幹に近く位置する。よって、受身形を活用表に含めるのであれば、当然ながら使役形も活用表に含めるべきである。かくて以上のような活用表が得られるという次第である。

ただ、活用表は以上で尽きているかと言えば、必ずしもそうではない。もとより、日本語には多くのいわゆる助動詞があり、それが動詞（の語幹）と組み合わせさって様々なニュアンス（印欧語の場合では「法」 mood によって表現されるようなニュアンスなど）が表現されるが、ここで考えたいのはむしろ、論理を語るものとしての言語という点である。すなわち、論理を語るものとしての言語を考える場合、当然ながらそれら言語表現には肯定と否定がある。しかも、肯定・否定は基本的にどのような言い方についても可能でなければならない。であれば、活用表を構想する場合には、肯定形の活用表だけでなく否定形の活用表をも構想するべきなのではないか⁽³⁶⁾。

このように考えて、上記の活用表（肯定形の活用表である）に対応する否定形の活用表を構想すると、次のようになる（なお、否定形については未終止形（不定形）を書く必要がないため、以下では不定形の欄は省略した）。

①' 否定基本形

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	書かない／見ない	書かなかった／見なかった
	kak-a-nai mi-nai	kak-a-nakatta mi-nakatta
名詞 修飾形	書かない／見ない	書かなかった／見なかった
	kak-a-nai mi-nai	kak-a-nakatta mi-nakatta
仮定形	書かなけれ(ば)／見なけれ(ば)	(書かなかったなら)／(見なかったなら)
	kak-a-nakere(ba) mi-nakere(ba)	(kakanakatta-nara) (minakatta-nara)
命令形	書くな／見るな	—／—
	kaku-na miru-na	

②' 否定使役形

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	書かせない／見せない	書かせなかった／見せなかった
	kakase-nai mise-nai	kakase-nakatta mise-nakatta
名詞 修飾形	書かせない／見せない	書かせなかった／見せなかった
	kakase-nai mise-nai	kakase-nakatta mise-nakatta
仮定形	書かせなけれ(ば)／見せなけれ(ば)	(書かせなかったなら)／(見せなかったなら)
	kakase-nakere(ba) mise-nakere(ba)	(kakasenakatta-nara) (misenakatta-nara)
命令形	書かせるな／見せるな	—／—
	kakaseru-na miseru-na	

③' 否定受身・自発形

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	書かれない／見られない	書かれなかった／見られなかった
	kakare-nai mirare-nai	kakare-nakatta mirare-nakatta
名詞 修飾形	書かれない／見られない	書かれなかった／見られなかった
	kakare-nai mirare-nai	kakare-nakatta mirare-nakatta
仮定形	書かれなけれ(ば)／見られなけれ(ば)	(書かれなかったなら)／(見られなかったなら)
	kakare-nakere(ba) mirare-nakere(ba)	(kakasenakatta-nara) (mirarenakatta-nara)
命令形	書かれるな／見られるな	—／—
	kakareru-na mirareru-na	

④' 否定使役受身形

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	書かせられない／見せられない	書かせられなかった／見せられなかった
	kakaserare-nai miserare-nai	kakaserare-nakatta miserare-nakatta
名詞 修飾形	書かせられない／見せられない	書かせられなかった／見せられなかった
	kakaserare-nai miserare-nai	kakaserare-nakatta miserare-nakatta
仮定形	書かせられなけれ(ば)／見せられなけれ(ば)	(書かせられなかったなら)／(見せられなかったなら)
	kakaserare-nakere(ba) miserare-nakere(ba)	(kakaserarenakatta-nara) (miserarenakatta-nara)

命令形	書かせられるな / 見せられるな	— / —
	kakaserareru-na miserareru-na	

以上、否定形の活用表を書いてみた。無論、このような表は活用表としては必要ない、肯定形の動詞＋否定の助動詞「ない」と理解すればそれで充分だ、という主張もありえよう。しかも実際、否定の命令形としては、否定形それ自体の独自の形でなく〈肯定の終止形＋禁止の終助詞「な」〉という形が使われ、このこともまた、この活用表の不完全さを示していると言えるかもしれない。だが、ここで注目すべきは、動詞の活用は、肯定形だけでなく否定形も含めて考えると、「ない」という助動詞を使うことによって、今日の日本語学が言ういわゆる「イ形容詞」の形を大幅に取り込んでいる、という点である。この点は、日本語における動詞の活用がいったいどのようなものであるかを考える上で、示唆をもたらしているのではあるまいか。

4. いわゆる形容詞をどう考えるべきか

つまり、如上ペンディングにしてきた問題、すなわちいわゆる形容詞をどう考えるべきかという問いに対して、次のように答えることができるのではないか。すなわち、いわゆる形容詞は動詞の一種である、と。

実際、いわゆる形容詞は活用をするのであり、活用表は次のようにまとめられる。

	未完了形（現在形）	完了形（過去形）
終止形	高い / 美しい	高かった / 美しかった
	taka-i utukusi-i37	taka-katta utukusi-katta
名詞 修飾形 ⁽³⁸⁾	高い / 美しい	高かった / 美しかった
	taka-i utukusi-i	taka-katta utukusi-katta

仮定形	高けれ(ば) / 美しけれ(ば)	高かったら / 美しかったら
	taka-kere(ba) utukusi-kere(ba)	taka-kattara utukusi-kattara
命令形 ⁽³⁹⁾	(高かれ) / (美しかれ)	— / —
	(taka-kare) (utukusi-kare)	
未終止形 (不定形)	高く / 美しく	— / —
	taka-ku utukusi-ku	

見られるように、いわゆる形容詞は、本稿で動詞の活用形として提唱した様々な形（終止形、名詞修飾形、仮定形）を持ち合わせており、この点に関する限り、いわゆる形容詞を動詞の一種とみなすことに不都合はない。

但し、いわゆる形容詞をこれまでの文法範疇（特に、印欧諸語で培われてきた文法範疇）に照らして理解できるのは、このあたりまでであり、ここから先は、むしろ印欧諸語の文法範疇では割り切れないことのほうが多いと言わなければならない。

例えば、如上で筆者はいわゆる連用形を、むしろ未終止形（不定形）と理解するべきだとの提案を行なった。これについて、いわゆる形容詞の場合を見ると、いわゆる形容詞のいわゆる連用形（すなわち未終止形）は「高く」「美しく」という形である。いわゆる形容詞のこのク形が名詞として使われるケースは、若干は存在するものの（「多く」「遠く」「近く」）、それらはごく一部であり、むしろ一般的にはク形は副詞である（或いは、副詞の機能を果たす）と言ってよい。不定形とは本来、言うまでもなく、動詞の機能と名詞の機能を併せ持つ形であり、それが副詞となるということは直ちには認めがたい。しかしだからと言って、いわゆる形容詞を動詞の一種とする認定がくつがえるわけではなく、また、ク形がいわゆる形容詞の未終止形であることも依然妥当する。つまり、このク形をどう理解するか（特にいわゆる形容詞の活用との関連でどう理解するか）は、従来の文法範疇に頼っていたのでは解けない問題であるように思われる⁽⁴⁰⁾。

印欧諸語の文法範疇を用いた場合に最も割り切れない、日本語の言語事

実とは、日本語のいわゆる形容詞の振る舞いなのである。これをどう理解するかについては、我々はもはや印欧諸語の文法範疇には頼れない。そこで、これまでの観察をまとめるなら

- いわゆる形容詞は、その活用から見て、動詞の一種である。
→ よって、日本語のいわゆる形容詞は、言うなればそれこそ「形容動詞」(adjectival verb) と称することができよう⁽⁴¹⁾。
- いわゆる形容詞は、副詞の機能を有する「〜く」という形を有し、このク形は「-u」で終わる動詞の未終止形に相当する。
→ いわゆる形容詞（実は形容動詞）のこのク形を不定形とすることは、従来の不定形理解からあまりにも逸脱しており不可能である。よってさしあたり、形容動詞の未終止形は不定形でなく副詞の機能を持つ、と理解するほかない。

日本語のいわゆる形容詞が、印欧語の文法範疇から見た場合に割り切れない言語事実であるという認識は、筆者が初めて得たものでは無論全くない。そもそも日本語文法の歴史の中で用言概念が提起され、明治以降今日に至るまでそれが維持されてきたことは、このような認識を背景としていたのではないかと想像することができる。また最近では、松本克己『世界言語のなかの日本語——日本語系統論の新たな地平——』、三省堂、2007年の「4.4 形容詞のタイプ」ではまさにこういう認識が指摘されている⁽⁴²⁾。言語系統論にまで議論を拡大する用意は筆者にはないが、日本語を世界の諸言語の中で位置づけようとするこのような試みは大いに注目すべきであり、しかもそれが日本語文法のより正しい理解と連携する可能性があることは、なおさら注目に値しよう。

5. いわゆる未然形をどう考えるべきか

本稿を終える前に、いわゆる未然形についても一言しておかなければならない。いわゆる連用形の場合と同様、いわゆる未然形の定義ないし意味について解説しているものは文法書でも辞典でも多くない。例えば『広辞苑』には

みぜんけい【未然形】動詞・形容詞・助動詞の活用形の一。これに助動詞を添えて未来・推量・比定などを、また、文語では助詞「ば」を添えて仮定条件を表す形。「花咲かば」の「咲か」の類。

とあり、『新明解』には次のようにある。

みぜんけい【未然形】〔日本語文法で〕活用語の語形の一つ。意志・推量・打消などを表わす助動詞（および文語で特定の助詞）が接続するときの形。

慧眼な読者には既に明らかなように、実は本稿は、いわゆる連用形概念だけでなくいわゆる未然形概念も換骨奪胎が可能であるとの立場から、既にそのプロセスを進めつつある（例えば、使役形、受身・自発形、使役受身形のそれぞれについて活用表を作るというのがその一つである）。そして実際、いわゆる未然形の説明の中から使役・受身の助動詞の場合を度外視すると、いわゆる未然形の形は、いわゆる連用形の形と大幅に似てくるのである。伝統的な学校文法の活用表によってこれを示すと次のようになる⁽⁴³⁾。

	カ行変格活用	上一段活用	下一段活用	五段活用	サ行変格活用			
					愛する	する	参ずる	対決する
未然形	こ	イ	エ	ア	さナイ しナイ せズ	しナイ せズ	しナイ せズ	しナイ せズ
	こ	イ	エ	オ	そ し	し	じ	し
連用形	き	イ	エ	イ	し	し	じ	し
終止形	くる	イ・る	エ・る	ウ	する す	する	ずる	する す
連体形	くる	イ・る	エ・る	ウ	する す	する	ずる	する す
仮定形	くれ	イ・れ	エ・れ	エ	すれ	すれ	ずれ	すれ
命令形	こい／ こよ	イ・ろ ／イ・ よ	エ・ろ ／エ・ よ	エ	せ(よ)	しろ／ せよ	ぜよ	しろ／せ よ

この表で、まずカ行変格活用（来る）でいわゆる未然形といわゆる連用形の形が異なるのは、そもそも動詞「来る」が、複数の語幹を用いる不規則活用動詞だからである。

そこでこれを度外視すると、いわゆる未然形といわゆる連用形が異なるのは、五段活用の場合、及び、サ行変格活用のうち動詞「愛する」を五段活用に準じて活用させた場合（「愛さない」及び「愛そう」）、そして「～せず」という言い方だけとなる。

このうち「～せず」という形については、古語の完了助動詞「り」との関連で、サ行変格活用の動詞の後に完了の助動詞がついた形「～せり」「～ぜり」に対する否定として「～せず」「～ぜず」という形が使われ、その残滓が今日まで残っていると理解できる⁽⁴⁴⁾。いずれにせよこの「～せず」も不規則活用であり、これも度外視してよい。

すると、ここで問題となる、いわゆる未然形といわゆる連用形が異なる活用とは、五段活用だけである。しかも、いわゆる未然形のうち「書こう」という形はもともと「書かむ」から来ており、よって、問題とするべ

き未然形の形は「ア」だけである。

つまり、いわゆる未然形という形をどう考えるべきかという問いは、この母音アをどう考えるべきかという問いに還元することができる。これについてここで十全な議論を展開する用意は残念ながら筆者にはないが、それでも次の可能性を指摘しておきたい。すなわち、このアは、五段活用 of 動詞（もちろん子音幹動詞である）と子音で始まる助動詞（などの動詞形成素）が結合しようとする際に、日本語の音韻体系が基本的に開音節しか許容しない（逆に言えば、閉音節を許容しない）音韻体系であるため、言わば結合母音を必要とした、その結合母音なのではなかろうか。そしてそうだとすれば、いわゆる未然形（実際にはたぶん、動詞の語幹、或いは動詞の語幹+ア、という形）に接続するとされる助動詞は、接続する動詞と相俟って、当の動詞のニュアンスを様々に変える作用をもたらしているのではあるまいか。この点をより深く検討するためには、口語よりも遥かに豊かな助動詞群を有した文語の段階に遡って検討を行なうことが必要だろう。そしてその検討結果は、たぶん間違いなく、日本語の動詞の活用表のあり方（さらには動詞の理解の仕方）を大幅に変えるものとなるはずである。そのようなことに筆者自身が着手できるかどうかは全く不明だが、今後の課題としてここで記しておきたい。

6. 終わりに

以上、本稿で扱ってきた論点及びその結論をまとめて提示すると以下のようになる。

- 本来の意味での（つまり、印欧語等におけるように形態論的含意を踏まえた意味での）形容詞と呼ぶにふさわしいのは、日本語のいわゆる形容動詞の語幹である。
- この関連で、日本語の名詞は、格助詞から切り離されたものとして認

識するのが妥当であり、だからこそ日本語の真の意味での形容詞もまた、いわゆる形容動詞の語幹（つまり、それだけでは文の構成要素たりえない形）だとすべきである。

- SOV 言語の一つである日本語の場合、動詞は、文の主語と目的語のさらに後に来る（概して文末或いは節の末尾に来る）構成要素を成すという規定性のもとにあると言ってよく、したがって日本語の動詞の活用形（具体的には終止形、名詞修飾形、仮定形、命令形）は、節を終止させる機能を持っていると理解することができる。
- 日本語の動詞のいわゆる連用形は、節を終止させないという意味で未終止形だと言ってよい。そしてこの未終止形は、U型動詞（すなわち、動作動詞）の場合にはそのまま不定形としての機能を有する。
- 日本語の動詞の活用表は、他の諸言語の動詞の活用表と同様、アスペクトの違いを根本に据えて構想されるべきである。
- 日本語のいわゆる形容詞は動詞の一種（形容動詞 *adjectival verb*）とみなすべきである。また、いわゆる形容詞のいわゆる連用形「〜く」は副詞形と理解するべきである。よって、従来用いられてきた用言という文法概念は不要であり、廃棄されるべきである。

さらに本稿では、未然形をどう考えるべきかについて、一種の方針を示せたと思う。

最後に、なぜ筆者が自らの専門外の領域に属するこのようなテーマについて拙文を書こうと思ったか、その理由を記しておきたい。もとより、何かの拍子にこういう考えを持ってしまったので、何らかの形でそれを発表しないことには、自分の中で整理がつかない（放念して別のことに踏み出すことができない）から、というのがその理由である。

ところで、これは専門化の進展の悪弊だと断じてよいが、専門化が進展すればするほど、専門家は素人（門外漢）のアイディアを聞こうとしなくなる。ところが、専門化の進展は必ずや当該分野の狭隘化を伴っており、

そしてその狭隘化はいつしか必ず、当該分野の学問的發展を阻害するに至る。ところが、自らの専門の勉強に埋没している者は、往々にしてその危険に気づかないのである。或いは気づいたとして、そこで自らの視野を広げようとしたとしても、それは所詮耳学問の領域を出ず、しかも専門家としての自らの地位を高めるものには決してならない。ここで問題にしている専門化の進展とは、まさに本来、自分が他の分野に通じることを阻害する程度の進展だからである。

ならば、そのような状況にあって、なお有意義な学問的發展を図れるようにするためにはどうしたら良いか。自らの分野にかかわる他者の声に対してあらゆる意味で関心をいただくよう努力すること、これくらいしか方法はないのではなからうか。自らを専門家と位置づけて他者の声に対する回路を閉ざしてしまう時、そのような研究からは有意義な学問的發展はいずれ失われるだろう、ということをここで記しておきたい。

今一つ、筆者がなぜここまで日本語文法にこだわるか、その理由を記すのも無意味でないかもしれない。ベルギーのフランス語圏に留学した筆者は、同地の大学生（に限らないのだろうが）が、自国語（フランス語）の文法をよく勉強して知っている、ということを痛感させられ、そして、自国語の運用のために自国語の文法を学ぶというこのことは、当然のように、日本では全く行なわれていないと気づかされた。つまり、方やフランス語を学ぶ連中は、自らの言語知識及び言語感覚を絶えず文法に照らして鍛えかつ修正し、しかも既述のように、言語は本来論理を語るものなので（論理だけをとまでは言わないが）、自国語の文法的学习を通じて論理的思考の訓練をも受けていることになる。しかもその期間が、大学に入るまでに既に十数年に及ぶ。これが日本人には全く欠けているのである。彼我の差は極めて大きいのではないか、と思った次第である。

日本人の場合、日本語教育に欠けている「文法的学习を通じて論理的思考の訓練」は、実際には英語学習を通じて行なわれている。だがこれは、日本語の論理性に自ら目を塞ぐ所業であり、自ら「日本語は論理的であり

ません」と言うのと大差ない。この憂うべき状態を改めるために必要なのは何か。まともな日本語文法、しかも規範文法である（国語の授業で現在行なわれている現代文の授業などは即刻廃止して、規範文法の学習・運用に充てるべきである——それほどにこれは必要である）。規範文法を獲得せずには、日本人は、言わばもともと割り切れた文法を神から恵まれた（したがって、自ら勞せず、言語学習を通じて論理的思考の訓練を積むことができた）西欧人と、対等に伍して競争することは望むべくもないのではないか⁽⁴⁵⁾。本稿は、規範文法への思い入れの強さが書かせたものでもあることを記して、文字どおりの拙文を閉じることとしたい。

〈補論〉「高くなる」「赤くなる」をどう解釈するべきか

この補論で扱いたいのは、「高くなる」「赤くなる」、また「快活になる」「朗らかになる」といった表現をどう解釈するかという問題である。この問題は、いわゆる連用形を廃棄することによって表面化したとすることができるが、実際には、いわゆる連用形という言い方によっても説明がついていたわけではない。もともと「高く」「赤く」「快活に」「朗らかに」については、いわゆる連用形という規定の他に、それらの形が副詞の機能を果たすということも明白であり、いわゆる連用形を認める場合には、連用形という規定と副詞の機能とがどう折り合うのか、という問題が生じるからである。

ともあれ、この表現をどう理解するべきかについて私見を述べると、「～なる」は「副詞＋なる」という表現だと解すべきであり、そしてその意味は、「当の副詞に対応する形容動詞或いは形容詞の状態が出現する」というものだとして理解するべきである。

副詞＋動詞という構文が状態を表す表現として用いられている例は、例えば古代ギリシア語に求めることができる。すなわち、ギリシア語の「持つ」という動詞 *ἔχω* は、その他動詞としての用法の他に自動詞として副詞を伴って主語の状態を表すことができ、例えば *καλῶς ἔχω*（直訳は

「私は良く持っている」)は「私は調子が良い」という意味になる。日本語でも副詞＋動詞という構文が状態(正確には、日本語の場合には状態の変化)を表す表現として用いられると考えるのは、別段不思議でない。

これに対して、同じく変化を表す「名詞＋助詞＋なる」という表現については、その際の助詞をどう位置づけるべきかは、ここではなお未決定にしておきたい。なぜなら、そのような助詞としては「に」と「と」が使用可能だが、それぞれを格助詞とした場合、それぞれがいかなる格を表示しているかは、にわかには決しがたい問題だからである。

注

- (1) 管見の限りでは、庵『入門』が、「入門」という表題にもかかわらず、日本語文法の新たな理解を提示しようという意気込みのもとに書かれており、注目に値する。特に同書は、各セクションの末尾に参考文献を掲げており、(無論それら文献は日本語学研究のごく一部をカバーするだけのだろうが)筆者のような門外漢には有用な情報源を成している。同書から裨益を受けたことをここで率直に認めておきたい。但しそのことが、本稿で同書の内容を批判することを妨げるわけでないこともまた、予め断わっておきたい。
- (2) 新村出編『広辞苑第6版(机上版)あーそ』, 岩波書店, 2008年, 11頁。なお、この内容は同書第5版(1998年刊)と全く同じである。
- (3) 『広辞苑第6版(机上版)付録』, 岩波書店, 2008年, 199頁。この記述も第5版と全く同様である。
- (4) 『新明解』, 10頁。この記述は、遅くとも同辞典の第4版(1991年刊)以来不変のようである。
- (5) これに対しては例えば「静かが服を着て歩いている」, などといった文が反証として出されるかもしれない(が、同じことを言うならまだしも、「静かさが服を着て歩いている」と言うべきだろう)。しかし仮にそのような文が可能だとしても、和語からなるいわゆる形容動詞の語幹すべてについてそのような文が成り立つわけではない。ところが名詞は、いかなる名詞であれ例外なく、(意味的にはともかくも、少なくとも文法上は)主語に立つことが可能である。

- (6) 問題の所在を示すのに辞典の付録的解説のみによるのはいかにもうまくないので、論文などからもっと明快な研究状況 (status quaestionis) がわからないかと思ひ、「CiNii Articles」(<http://ci.nii.ac.jp/>) という Web サイトで「形容動詞」を検索語として検索し (2012 年 9 月 29 日実施), 194 件のデータを得たが、参考になるものは多くなかった。わずかに、山橋幸子「和語における「形容詞」と「形容動詞」の区別：形式と意味との関りを中心に」, 『比較文化論叢』(札幌大学文化学部紀要) 23 (2009), 162-149 頁は、研究状況を概観して 161 頁で次のように述べ、研究状況の一端を垣間見させてくれる限りで有用だった。

日本語における状態や属性を表す語の品詞論は複雑を極めているが、とりわけ、「形容動詞」(「ナ-形容詞」, 「名容詞」(寺村秀夫 1982)) の場合は複雑で、学者により様々な意見が提案されている。……これらは、「形容詞」との比較において更に、二つの立場に分かれる。ひとつは、伝統的な学校文法で採用されている立場で、形式上の特徴に重点を置き、「形容動詞」を「形容詞」とは異なる品詞として区別する立場である(時枝誠記, S. Martin, E. H. Jordan 他)。他は, A. E. Backhouse (1984) の主張にあるように意味上の共通性に重点を置き、両者を同一の品詞と捉え、形式上の違いを下位分類の問題と見なす立場であり、最近の日本語教育でも多く採用されている。(後略)

ただ、このような問題状況を受けて同論考が行なっているのは、「「形容詞」と「形容動詞」とは形式上区別されているように意味上も区別されていることを主張すること」(同 162 頁) という議論であり、もっぱら形態論的レベルを扱う本稿にはかかわってこない。

- (7) 時枝誠記『日本文法 口語篇』(岩波全書), 岩波書店, 1950 年, iv 頁。旧仮名づかいを新仮名づかいに、旧字体を新字体に、それぞれ書き改めて引用した。
- (8) 庵『入門』, 56-57 頁。
- (9) O. JESPERSEN, *Philosophy of Grammar*, London: George Allen & Unwin, 1924, p. 72 は形容詞 adjective と名詞 substantive の両方を包含する概念として noun (nomen) という概念を提出している (noun という語をこのような意味で使っているのは決して Jespersen が最初ではない)。なお、両

者の一括が可能だからと言って、両者の間の差異が閑却されるわけでないこともまた、言うまでもない。

- (10) なお、これらの「変化」は印欧語の文法ではいずれも declension と呼ばれ、動詞の「活用」 conjugation とは質的に異なるものとして区別されている（そして両者を包含する概念が屈折 inflection である）。この点を踏まえ、かつ日本語文法でも「活用」という語が第一義的に動詞に関して使われていることに照らすなら、「名詞の活用」（庵『入門』、47 頁）という表現はそもそもナンセンスである。

- (11) 「に」という形態素に関して以上述べたことは、ふつうの辞典の記述などと異なっており、直ちには受け入れがたい、という受け止め方もあるだろう。このような反応に対しては、まずふつうの辞典がどのように「に」を取り扱っているかを見るところから始めて応答する必要がある。

例えば『新明解』によれば、格助詞「に」には次の用法がある（以下、例文などを適宜省略して引用）。

「①時点・期間を表わす。 ②その事物が存在する場所を表わす。 ③移動の到着点を表わす。 ④変化の結果、生じたものや状態を表わす。「湯が水になる／信号が赤に変わる／豆をひいて粉にする」 ⑤動作・作用が、その相手に対して行なわれることを表わす。「君にだけ話す／神に誓う／猫がネズミにかみつく」 ⑥〔自発・可能・感情述語の表現で〕感情・知覚・思考の主体を表わす。 ⑦〔受身表現・使役表現や「(て) もらう」などを述語にもつ表現で〕動作・作用の主体を表わす。 ⑧問題として取り上げる対象の範囲を限定することを表わす。「その点に関しては検討の余地がある／先生にはお変わりなくお過ぎのことと存じます」 ⑨動作・作用が、どんな状態・状況で行なわれるか、ということを表わす。「会わずに帰る」 ⑩（その状態を認めさせるものとしての）基準や対象を表わす。「AはBに等しい」 ⑪動作・作用が何を目的として行なわれるかを表わす。「昼は食事に帰る／駅まで迎えに出る／本を買いに行く」 ⑫ものに、さらに何かを添える意を表わす。「鬼に金棒／パンにミルクに卵」 ⑬動作の継続・反復（・動作の程度の激しさ）を表わす。「待ちに待った／揉みに揉む／大揺れに揺れている」 ⑭〔「…に…（否定）」の形で〕…しようとしてもできないことを表わす。「泣くに泣けない」」

この説明は明らかに混乱を極めている。ここで出てくる「に」には、名詞に接続する本来の意味での格助詞だけでなく、動詞の活用形に接続するもの(⑨、⑭)や、動詞のいわゆる連用形に接続するもの(⑪の一部、⑬)もあるからである。少なくとも⑨と⑭は、格助詞として説明するべきではないだろう。

本文で筆者(戸田)が提示した見方に従えば、⑭まで列挙されているこれら用法のうち、①②③が所格の助詞(或いは後置詞)であることは明らかである。また、⑥⑦⑩が与格の助詞であることもこれもまた明らかである。④については、これを与格の助詞の用法と見ることは可能だろうが、この点についてはにはわかには決しがたい。なぜなら、例えばロシア語では「～になる」の「～に」は造格(すなわち具格 instrumental)で表現されるなど、変化を表す表現(「～になる」)はそれぞれの言語で独特な言い方をとることが知られているからである(これについてはさらに本稿末尾の補論を参照)。⑤については、「君にだけ話す」「神に誓う」の「に」は与格の助詞であり、これに対して「猫がネズミにかみつく」の「に」は所格の助詞である。⑧については、「その点に関しては」の「に」は所格の助詞であり、これに対して「先生にはお変わりなく」の「に」は与格の助詞である。⑪の「食事に帰る」の「に」をどう理解するかは、同じ⑪で挙げられている他の「に」をどう理解するかによって変わりうるが、とりあえず所格の助詞(或いは後置詞)としてこれを理解できるだろう。最後に⑫については、この「に」が「～に加えて」という含意で使われているところからすると、この「に」は与格の助詞と理解するのが妥当だろう。

以上、本文で筆者が提示したように、格助詞「に」を与格の助詞と所格の助詞に分けて理解する理解は、④の例についてなお問題が残るが、格助詞「に」をより正確に理解するのに資すると言えよう。

次に、本文の③で述べた「形容動詞の語幹の後に副詞を作る「に」」については、これを断定の助動詞「だ」のいわゆる連用形とする理解があることを筆者は承知しているが、そのような理解は採らない。理由は、いわゆる連用形という形をどう理解するかということにかかわる。後述 3.2 を参照。

- (12) 因みにコプト語では、与格を表す小辞と所格を表す小辞はどちらも n で表される(日本語の「に」と子音が一致するのは、全くの偶然だろう)。また、対格すなわち直接目的語を表す小辞も n で表される。ただコプト

語の場合、この小辞（または前置詞）が代名詞を従える時にとる形（言わば代名詞接続形）があり、その形によって、それが与格を表す小辞かどうかが区別できる。具体的には、対格を表す小辞 *n* の代名詞接続形 (*mmo=*、二重ハイフン (=) は、その後ろに代名詞非分離形が接続することを示す) と与格を表す小辞 *n* の代名詞接続形 (*na=*) は形が異なっており、そして、所格を表す小辞 *n* については代名詞接続形は知られていない。

- (13) なお、この議論に対しては、格助詞「が」が主格と属格の両方を表示する（つまり、同じ助詞が複数の機能を持ちうる）という点に注目して、与格の格助詞「に」と所格の格助詞「に」を別の単語だとする理解に対する批判があるかもしれない。これについてはまず、格助詞「が」の、主格を表す機能と属格を表す機能とは、区別して理解するのが妥当であり、同じ格助詞「が」が主格と属格という異なる二つの格を表示することは、認められるべきである（無論、属格に関しては他に「の」という格助詞もあるのであって、「が」は排他的に属格の格助詞であるわけではない）。だが、属格の格助詞としての「が」は、属格の機能のすべてをではなく、その中の「所有者を表示する属格」を表し（例えば「我が喜び」「我が指針」）、この場合の所有者は、属格の後に続く名詞にとっての何らかの意味での「主語」を表していると言える（例えば「我が喜び」については「私が喜ぶ」という関係があり、「我が指針」についても「私が立てる指針」という関係があると言える）。よって格助詞「が」の、主格を表す機能と属格（或いは所有格）を表す機能は、統一的に理解できる。他方、与格の格助詞「に」と所格の格助詞「に」を統一的に理解することはできない。そしてそもそも、開かれた文法理解を目指す本稿の立場からすれば、他の諸言語で別々の格として理解されている格を無理やり統一的に理解せねばならない理由は存在しない。
- (14) 以上を踏まえて、庵『入門』、56-57 頁に見られる「イ形容詞」「ナ形容詞」という区分を批判すると、まずこの区分は、形態論上の地位が異なるものを「形容詞」として一括している点で、品詞区分の形態論的含意を無視している。次に「ナ形容詞」という言い方は、日本語文法の正確な理解からすれば分離して理解するべき、形容詞（＝いわゆる形容動詞の語幹）と「な」（形容詞と名詞をつなぐつなぎの小辞だと、さしあたり言ってよい）とを一語にしてしまっている点で、批判されねばならない。なお、コプト語には、形容詞と名詞をつなぐ *n* という小辞が存在する（日本語の

「な」と子音が一致するのは、全くの偶然だろう)。

忖度するなら、庵『入門』に見られる文法は、なお相当程度、外国人の日本語学習との関連で構想された学習用文法としての性格を帯びており、そのことが、「イ形容詞」「ナ形容詞」という言い方につながったのではないと思われる。もちろん、日本語学習の便宜ということは、そのような実践の場にあってはそれなりに顧慮されてよい点だろう。だが、日本語の文法的分析において厳密さを目指すのであれば、文法範疇の正確な使用及び正確な品詞区分はないがしろにされてはならないはずである。「バ形」(庵『入門』、54-56頁)という言い方に対しても、これと同様の批判が当てはまる。後註21を参照。

- (15) 庵功雄『『象は鼻が長い』入門——日本語学の父 三上章——』、くろしお出版、2003年、43-44頁。
- (16) ここで「定動詞」と訳すべき finite verb という文法範疇を簡単に「述語」と訳してしまっていることに、三上の日本語学の問題性が露呈しているように筆者には思われる。本稿3.2.で述べるように、定動詞という概念は形態論的含意を有する概念なのである。印欧語文法で使われている文法範疇の含意を汲み尽くさずに「西洋文法」を批判することは、実に底の浅い批判であり、筆者はこれを到底支持できない。
- (17) この場合、主格と言うより主語と言うほうが妥当である。なぜなら、孤立語である中国語には、文中の名詞的要素の格を示す格語尾に相当する要素が存在しないからである。なお、最近の言語学者は、この文の「我」を主語でなく主題だと主張するかもしれないが、「唱」が動詞である以上、その動詞の動作主が誰かということは明示される必要がある。そしてその動作主こそが、まさに従来の文法が呼ぶところの「主語」である。この文で主語の存在を認めない文法的分析は到底支持できない。
- (18) これに対しては、古代ギリシア語やラテン語といった、現代語よりもヨーロッパの言語の源流に近い古典語を引き合いに出して、これら諸言語では動詞は、文頭から数えて2番目の要素を必ずしも成していない、との反論があるかもしれない。これについては、今日文字で残っている古代ギリシア語・ラテン語の著作は、極度の技巧的文飾を駆使して書かれた、その意味で極めて人為的な言語を反映しているということが、まず指摘されねばならない。つまり古代ギリシア人が、それら著作で書かれているとおりの語順でギリシア語を語るのがふつうだったかどうかは全く不確かである。

そして、ここで言われる SVO 言語という表現における語順は、ふつうに母語話者が（書いたのではなく）語った場合の語順を指すと言ってよい。

- (19) もちろん日本語の場合には、いわゆる終止形の後にも終助詞が来ることができ、それら終助詞は様々なモダリティを表現し、以て日本語の表現の可能性を豊かにしていると言えるが、その事実はこちらで述べている議論の否定にはならない。モダリティについては庵『入門』、166 頁以下を参照（但し同書はモダリティを、終助詞以外によっても表されるものとして提示している）。
- (20) 国語学ではふつう連体節という言い方が用いられるが、本稿ではその言い方は採らない。その理由は、体言と対比される用言概念に関する本稿の立場にかかわる。後註 22 及び本稿 6.「終わりに」を参照。
- (21) いわゆる接続詞が節と節をつなぐものであるなら、日本語の場合、位置から見てまさにこの「ば」のような接続助詞こそが、節と節の間に位置して、節と節（例えば条件節と主節）をつなげていると理解できる。つまり日本語では、接続助詞こそが真の意味での接続詞なのである。これを動詞の活用形から切り離して理解することは正しい日本語理解のために極めて重要であり、よって、庵『入門』、54-56 頁に見られる「バ形」というまとめ方（上記註 14）は、日本語の正しい理解に資さず、支持できない。

「バ形」という呼称はたぶん、寺村『シンタクス』の提唱に従ったものだろう。寺村（1982）、48 頁は

学校文法では「咲ク」の「ク」は活用語尾、「咲イタ」の「タ」は「助動詞」、「咲ケバ」は、語幹（？）「咲」と活用語尾「ケ」接続助詞「バ」の三つの部分から成ると説明しているが、第 4 章で述べるように、この考え方は採らない。「咲ケバ」も、語幹 sak- と、活用語尾 -eba から成る一語とする。

と述べ、その第 4 章では（寺村（1984）、29 頁の議論を指すものと思われる）、次のように述べている。

「書ケ」が、「バ」に続く場合は「仮定形」、そこで言い切って命令の意味を表わす場合は「命令形」とする、というのは、上の仕分けでは (b) の原則「同じ形でも使い方が違えば違う活用形と見る」（同 27

頁) という原則を指す…戸田] によっていることになる。「書ク」がそこで言い切って断定の意味になるときは「終止形」, 「書ク人」のように名詞につづくときは「連体形」というのも、同じ考えのようである。しかし, 「[名詞]につづく」というのと, 「[バ]につづく」というのとでは, その特徴のとらえ方にレベルの混同がある。名詞は一つの品詞であるが, 「バ」は, 学校文法の分類では接続助詞, つまり, 助詞という品詞の下位類に属する一つの形式である。

だが, この説明がなぜ, 「咲ケバ」を語幹+活用語尾と理解することの正当化たりうるのか, 筆者には全く理解不能である。特に, 接続助詞「ば」を日本語における真の接続詞（「一つの品詞」）と理解すれば, 寺村自身の判断基準から見ても「レベルの混同」は全く存在しないことになる。

- (22) いわゆる連用形という概念は, 無論, いわゆる用言との関連抜きには理解できない。日本語の文法的理解との関連で（特に活用との関連で）体言・用言という語を本格的に使い出したのは, 江戸時代の国学者契沖のようである。橋本進吉『國文法體系論』（橋本進吉博士著作集第七冊）, 岩波書店, 1959年, 244-246頁を参照（なお, 人名「橋本進吉」の「進」は旧字体で書かれている）。
- (23) 付言すれば, 「私はその本を読んで, 感動した。」という文の「読んで」という形も, 厳密に考えれば「読んだ。そして」という意味だと考えられる。ただ, では「読み」と「読んで」の間にはいかなる差異もないのか, そうではないと筆者は考える。後述註33を参照。
- (24) 『新明解』, 1658頁。
- (25) 同上, 1616頁。
- (26) 「動詞では, そのまま名詞形として用いられるものもある」というこの点は, より正確には「-uで終わる動詞のいわゆる連用形はそのまま名詞として使うこともできる」と言うべきだろう。
- (27) 時枝『文語』, 323-325頁。以下, 例文などを適宜省略して引用。なお, 原文は旧字体。
- (28) 言うまでもなく, 不定形についてのこのような理解は例えば印欧語文法の不定形理解の中には見られないが, 既述のようにこの点は, 日本語(SOV言語)と印欧語(SVO言語)の語順の違いという, 言語構造上の根本的な違いにかかわる点であり, 印欧語の不定形理解にこだわる必要は

ない。

- (29) なお, threaten to do の場合には動詞と不定詞の間に前置詞 to が入り (これに相当する仏語の表現は risquer de + inf.), これに対して désirer + inf. では動詞と不定詞の間に前置詞が入っていない。前置詞が入るかどうかというこの違いは, 各言語のそれぞれの単語の用法 (の史的変遷) に由来すると理解するのが妥当であり, このような違いが, 本稿の提唱する不定形理解に対する反証を成すとは言えないだろう。
- (30) A. MEILLET, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, 7. éd., Paris: Hachette, 1937, p. 197: La valeur des thèmes «temporels» indo-européens est donc semblable à celle des «aspects» slaves, non à celle des «temps» germaniques ou latins.
- (31) 庵『入門』, 152-153 頁, 「§ 12 時間を表す表現(2) —アスペクト—」からの引用。下線は原文。
- (32) 庵『入門』, 50-57 頁は「理想の活用表を求めて」という項目を含んでいるが, そこでの議論は, アスペクトに関する説明とは全く無関係に行なわれている。

管見の限りでは, 寺村 (1984), 119-122 頁の「一次的アスペクト——スル (未然) とシタ (已然)」という項が, 以下本稿でも述べる「〈する〉と〈した〉」という対立を扱っている。但し寺村は, この対立を活用表のあり方と結びつけて形態論の次元で把握しようとはしておらず, しかも「た」を伴う形を第一義的に過去形と解する誤謬に囚われ, 「た」の本義 (これについては次註を参照) を捉えそこなっている。

付言すると, 寺村『シンタクス』は, いわゆる国語学と異なる立場から日本語文法を本格的に探究した書物として, 日本語学研究史上画期的な意義を有するようであり, もちろん筆者はその点に異を唱えるつもりはない。ただ, 日本語文法が本来有すべき系統的文法書 (reference grammar) は, 文法的分析が既に確立している他の諸言語の系統的文法書の場合と同様, まず最初に音韻論を配し, 次に形態論を配し, そして最後に統語論 (シンタクス) を配するという順番で書かれるべきである。なぜなら, 音韻や語形といった外面的な事実 (これは比較的客観的に認識が可能であり, したがって理解の一致が比較的得られやすい) から始めて次第に言語の内面 (すなわち意味) へと進む論述方式こそが, 最も紛れの少ない形で当該言語の文法を提示することを可能にするからである。さらに, 音韻論から

始めて次に形態論を論じ、そして最後に統語論を論じるというこの観点は、単に論述方式の問題であるだけでなく、(まず音韻論で、次いで形態論で、可能な限り理解の一致を確認し、その上で統語論へと研究を進める、という意味で) 文法研究の正しい行き方を示している、と筆者は考える。

このような観点から見た場合、寺村『シンタクス』は、無論それ自体は系統的文法書を目指したものではないとはいえ、表題として統語論(シンタクス)を掲げて、その中で形態論的な議論を行なうなど、本来異なる次元として扱うべき諸次元を混同した形で議論を行なっている。このことが寺村の分析に限界を設けているように筆者には思えてならない。

- (33) この活用表に示すように、上記 3.2. の④で「助詞「て」及び助動詞「た」に従える用法については、私見によれば別の説明を必要とする」と書いたのは、まさにここに書いた説明、つまり「～(し)て」と「～(し)た」をそれぞれ完了形の未終止形(不定形)と終止形と理解すべきだ、という説明を念頭に置いていたからである。諸言語の文法が完了と未完了(継続)のアスペクトの対立をもとに動詞の活用表を構成していることを思えば、日本語の場合も活用表はこうなるほかないと筆者は考える。

なお、庵『入門』, 74 頁は「 $\{-u\}$ と $\{-i\}ta\}$ の対立で表される文法的意味は**テンス**です」(太字は原文。例えば「貸す」と「貸した」の対立を指す)と述べているが、この理解は日本語の言語事実に即さず(例えば「今度会った時にはただでは済まさないぞ」の下線部の「た」は過去を意味しない)、また「た」がいわゆる完了の助動詞「たり」に由来していること(『広辞苑』第5版, 1681 頁, 「たり」の項を参照)にも即さず、支持できない。確かに今日の日本語では、過去を表す表現で一般に「た」が使われているが、この用法は、本来完了を表す「た」が過去表現に転用されたものと理解するべきである。

ところで、完了を表す(または、転用の結果、過去を表す)助動詞である「～た」につながる形が不定形(例えば「書き」)であるという主張は受け入れられるだろうか。これについては、コプト語に類例が認められる。すなわちコプト語では、過去を表す接頭辞($a-$)が動詞の不定形につくと、その動詞は過去を表す。ローマ字による転記によって示すと、現在 $f-eine$ (「彼は担う」; f は主語が三人称単数男性であることを示す)、過去 $a-f-eine$ (「彼は担った」)となる。つまり、過去または完了を表す小辞が不定形につながり、それが全体として過去の動作等を表すという現象は、少な

くとも他の一部の言語では確認できるのであり、それが日本語に見られたとしても何ら不思議はない。

次に、註 23 で触れた問題、すなわち、「読み」（ここでの活用表に従えば、未完了形不定詞）と「読んで」（ここでの活用表に従えば、完了形不定詞）の間にはいかなる差異もないかどうか、という問いにもここで触れておきたい。もちろん両者の間には違いがあり、その違いは、両者に「～（して）しまう」という表現（もちろん、物事の完了を際立たせる表現である）が付けられるかどうか、という点で見分けられる。すなわち、「読んでしまう」という表現は全く可能であり、これに対して「*読みしまう」という言い方はできない。「読んで」という語形に完了の意味が含まれていることは明白である。

- (34) 見られるように、以下すべての場合で終止形と名詞修飾形の形は同じであり、したがって口語文法に関する限りでは、両者をひとまとめに扱うことは全く可能である。ここであえて両者を分けて書いたのは、古語文法との接続の可能性を念頭に置いているからにはほかならない。
- (35) 無論、この形は受身だけでなく自発や可能をも表すが（本来的に言えば、この形は自動詞化の形であり、これに対して使役形は他動詞化の形だと言える）、少なくとも形態論的にはそれらの意味は区別できないので、本稿ではそれらの区別は論じない。この点でも寺村（1982）は、同書第3章で「態——格の移動と述語の形態との相関」を章題とし、「態」という形態論的文法範疇を論じていながら、その際に「受動態」「可能態」「自発態」といった、意味の次元を顧慮しなければ区別できない区分を持ち込んでおり、上でも述べた次元の混同を行なっている。
- (36) このようなヒントを与えてくれるのは、コプト語における動詞の活用の整理の仕方である。すなわちコプト語の場合、動詞のいくつかの形（例えば第1完了形、第3未来形（或いは強勢未来形）、習慣形）については、肯定形と否定形が全く異なっているのである。
- (37) ここではローマ字表記は訓令式によることとした。
- (38) 周知のように、古語では終止形（「高し」「美し」）と名詞修飾形（「高き」「美しき」）が異なるため、古語文法との接続の可能性を考慮して、ここでは終止形と名詞修飾形を別々に表記した。
- (39) 庵『入門』、56頁は「形容詞には受身形、使役形、意志形、命令形はありません」とするが、ここでは『新明解』、1659頁の「口語形容詞・形容動

詞活用表」に従い、命令形を加えた。

- (40) 特に「高くなる」「赤くなる」といった表現、つまりいわゆる形容詞のク形に変化を表す動詞「なる」が続く場合、これをどう解釈するべきかという問題がある。本稿末尾の補論を参照。
- (41) この点の含意を明確にするなら、いわゆる形容詞を動詞の一種（言うなればイ型動詞）と位置づけることによって、用言という文法概念を使う必要がなくなる。既に見てきたように、用言概念と密接に関連するものである連用形概念は換骨奪胎が可能である。言わばその仕上げが、いわゆる形容詞を動詞の一種と位置づけることであり、かくて用言概念は不要となり、廃棄できるのである。
- (42) 同書、96-102 頁、特に 100 頁の次の言葉を参照。「日本語で形容詞とされる語類は、文法的には明らかに用言（＝動詞 [ママ]）の下位類であり、この点でヨーロッパ諸語あるいは印欧語の形容詞とは根本的に性格を異にする。ただし、日本語の形容詞は活用はするけれども、その活用法は動詞のそれとは明確に異なり、狭義の動詞と形容詞の間には明瞭な境界がある。この意味で日本語の形容詞は形態的に動詞とは別個の語類としてかなり自立した性格を帯びている」（厳密に言えば、用言＝動詞というのは用言概念の理解としてももちろん正しくない）。但し、松本の議論は、印欧語の形容詞を形容詞体言型（或いは体言型形容詞）、日本語のいわゆる形容詞を形容詞用言型（或いは用言型形容詞）と呼んで区別しているが、結局、両者をなお同じ形容詞という範疇でまとめており、本稿の立場からは支持できない。さらに、同書、102 頁註 30 では、形容動詞への関説も行なわれているが、同註では「国文法で「形容動詞」と呼ばれる語類は、その名称とは裏腹に、その語幹の部分に着目すればむしろ名詞に近い」と指摘されているのみで、いわゆる形容動詞の語幹こそが印欧語で言う形容詞であるとする本稿の主張は、同書には見られない。
- (43) 以下『新明解』、1658 頁の活用表に基づく。
- (44) なお、『広辞苑』第 3 版（岩波書店、1983 年）の助動詞「り」の項には次のようにある。「動詞連用形に「あり」の添った形、例えば「咲きあり」が母音結合のため「咲けり」となり、「け」が「咲く」の活用語尾のようになった結果、「り」が独立して扱われたもの。奈良時代には余段活用の已然形と命令形とに万葉仮名の区別があり、「り」の接続する「け」は命令形と同種の仮名で書かれている。これは母音結合の結果が命令形と同形

になったもので、命令の機能の上に更に「り」が加わったものではない。サ変につく場合も「しあり」から「せり」となったもので、四段と同じく命令形に接続すると考えるべきである。状態の存続を示し、後に完了を示すようになった」。本稿の議論との関連では、もともと未然形の形として「せ」という形が存在したわけではない、という指摘が重要だと言えよう。なお、この記述は『広辞苑』の後の版では一部変更されている（内容上大きな違いはないようだが）。

- (45) ここで言う「伍して競争する」分野として筆者が念頭に置いているのは、とりわけ人文・社会科学である。自然言語に依拠することの少ない自然科学と対比して、人文・社会科学の分野で日本人が欧米人と伍している分野は、残念ながらまだほぼ皆無に等しいと言ってよい（例えば一部ドイツ人の間では西田哲学に対する興味が示されつつあるようだが、その西田哲学は、あくまでも欧米の哲学に学んだものである）。